大人のためのファンタジー

J・K・ローリング「ハリー・ポッター」

現実包み込む新たな異界

井辻 朱美

（4）

Studies
スタディーズ

いまや知らない人がいない「ハリー・ポッター」シリーズ（J・K・ローリング）。1997年に第1作が発表されて以来、空前のファンタジーブームを巻き起こした。

このシリーズ以降の作品は「ネオ・ファンタジー」とも呼びならわされる。一体どこがこれまでの「十分に精密な」ファンタジーと異なっていたのか。

この物語では、孤児のハリーという少年が、魔法学校からの入学許可証を得て、今まで知らなかったもうひとつの世界に入ってゆく。英国のパブリック・スクールを彷彿とさせる寄宿学校生活は、箒に騎乗して行う空中サッカーであるクィディッチ、魔法の授業に試験、学校対抗試合、校内には秘密道具の隠れマントや見る者の望みを映す「みぞの鏡」のようなアイテムも隠され、楽しさ満載である。

むろん、悪の魔法使いである敵も存在し、シリーズ7巻の終わりまでには、ハリーとその仲間は種々の試練にさらされる。竜やヒッポグリフなど魔法生物の数々が恐怖と異化の感覚で読者を震撼させる。物語は実際の魔法やオカルトの歴史を踏まえており、十分に大人の読者の蘊蓄をも満足させるものだ。だが、一体どこが「ネオ」だったのか。

隣に存在する世界

まずひとつはこの物語が、もはや別世界ファンタジーではなく、リアルな現実をそっくり呑み込んでいる体裁をとっていることである。魔法学校行きの列車は実在のキングスクロス駅から出る。町には「迷子の魔法使い」を拾うバスが走っている。あたかも現実の市場で行われているのと同じような「新作箒」や「菓子」の発売があり、読者はそこが「現実」と連続であることは、すでに自明だと感じさせられる。

私の学生の大きな感想は「ハリー・ポッター」シリーズは、従来の別世界ファンタジーとは異なり、隣にその世界があり、すぐ入ってゆける気がする、というものだった。作者の一切の注釈なしに、そこは「現実」として語られている。魔法使いの世界と一般平民であるマグルは（ひそかに）共存し、お互いの行動を管理する「魔法省」があると説明され、社会全体はその全体構造の中に矛盾なく収まるので、本の外にはなんの外部も存在していないかのようだ。

私たちのいるマグルの世界を包含する、より大きな世界があることも含め、すべては「ネオ」現実として開示され、「現実」はこれひとつなのである。

ハリーたちの学年が上がってゆくごとに1冊ずつ発売されたという趣向も、全体を「現実」との同質性の中に違和感なく包みこむ。

いわば、これまでの別世界ファンタジーが、魅力的なモデルハウスを現実の外側に建てつづけてきたのとは違い、「ハリー・ポッター」は、その世界観の中に、これまでの「現実」を移築したのだ。デイズニーランドのワールドバザールのように。これが第一の点だ。

消えゆく境界線

さらに第二点として、この「ネオ」現実のなじみやすさ、たちまちにして私たちを取り込んだ親和力、心地良さの意味を指摘しておきたい。この世界では、実際の現実がもっている「境界」「ボーダー」自体が、知らぬ間に巧みに解除されてしまっているのだ。

たとえば魔法学校の校舎の中では、すべての家具が勝手に動き、階段はねじれつつ位置を変え、肖像画は口をきき、モノがあたかもつくも神のごとく動き回る。幼児期には自然なものであるアニミズムが、いまなお支配する魔術的な空間だ。モノと生き物を隔てるボーダーが消滅している。

幽霊は半永久的に学校に住み着き、過去について思い出を語り、校長室では歴代の校長が額縁の中から、コメントを述べつづけ、つまり「死」すらもわれわれを切断するボーダーではない。もちろんそれに伴って時間の流れも強制力を失う。

また、ポリジュース薬という魔法薬を飲みつづければ、だれにでも化けることができる。ハリーたちは魔法省の役人に化けて、役所に潜入する。個人の顔や姿もボーダーではなくなる。

特にハリーは、敵の魔法使いの分身たる大蛇に時空間を超えて同化し、体感を共有する。身体という器も、互いを隔てるボーダーの役目を果たさない。

これらの仕組みは、いかにも「現実らしく」装われたファンタジーの中における本源的な欲望、すなわち「現実がもっている」境界そのものをひそかに消し去りたいという欲望を、クライインの壺のような形で叶えているのではないか。

現実の外側に別世界があり、対照や差異を楽しむ、従来の対置構造では叶えられなかったものだ。

現実を包摂するネオ・ファンタジーは、私たちの魂が求めているのが、実はボーダーレスの「自由」そのものであったことを、大人にも思い出させてくれたのである。

（白百合女子大学教授）

＝この項おわり